

待降節第3主日礼拝説教 「ご来訪をお知らせします」

日本基督教団石神井教会 2019年12月15日

【旧約聖書日課】マラキ書 3章19～24節

19 見よ、その日が来る

炉のように燃える日が。

高慢な者、悪を行う者は

すべてわらのようになる。

到来するその日は、と万軍の主は言われる。

彼らを燃え上がらせ、根も枝も残さない。

20 しかし、わが名を恐れ敬うあなたたちには

義の太陽が昇る。

その翼にはいやす力がある。

あなたたちは牛舎の子牛のように

躍り出て跳び回る。

21 わたしが備えているその日に

あなたたちは神に逆らう者を踏みつける。

彼らは足の下で灰になる、と万軍の主は言われる。

22 わが僕モーセの教えを思い起こせ。

わたしは彼に、全イスラエルのため

ホレブで掟と定めを命じておいた。

23 見よ、わたしは

大いなる恐るべき主の日が来る前に

預言者エリヤをあなたたちに遣わす。

24 彼は父の心を子に

子の心を父に向けさせる。

わたしが来て、破滅をもって

この地を撃つことがないように。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 1章19～28節

19 さて、ヨハネの証しはこうである。エルサレムのユダヤ人たちが、祭司やレビ人たちがヨハネのもとへ遣わして、「あなたは、どなたですか」と質問させたとき、²⁰彼は公言して隠さず、「わたしはメシアではない」と言い表した。²¹彼らがまた、「では何ですか。あなたはエリヤですか」と尋ねると、ヨハネは、「違う」と言った。更に、「あなたは、あの預言者なのですか」と尋ねると、「そうではない」と答えた。²²そこで、彼らは言った。「それではいったい、たれなのです。わたしたちを遣わした人々に返事をしなければなりません。あなたは自分を何だと言うのですか。」²³ヨハネは、預言者イザヤの言葉を用いて言った。

「わたしは荒れ野で叫ぶ声である。

『主の道をまっすぐにせよ』と。」

²⁴遣わされた人たちはファリサイ派に属していた。²⁵彼らがヨハネに尋ねて、「あなたはメシアでも、エリヤでも、またあの預言者でもないのに、なぜ、洗礼を授けるのですか」と言うと、²⁶ヨハネは答えた。「わたしは水で洗礼を授けるが、あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる。²⁷その人はわたしの後から来られる方で、わたしはその履物のひもを解く資格もない。」²⁸これは、ヨハネが洗礼を授けていたヨルダン川の向こう側、ベタニアでの出来事であった。

その日が来る！

アドヴェントの三本目のロウソクが灯りました。「待降節（アドヴェント）」の第三主日は、古く「喜びの主日」と呼ばれてきた伝統を踏まえて、「紫色」のロウソクではなく、「ピンク色」のロウソクを灯しています。もっとも、このロウソクの色は「バラ色」と言うべきもののようで、この日の呼び名も「バラの主日」と呼ばれるのだそうです。

日本では、この色を見て「バラ」をイメージする人は少ないかもしれませんが、ヨーロッパではこの冬の季節に咲くある花のイメージがあって、これを「バラ色」と呼ぶようです。伝統的に待降節に朗読されてきた「イザヤ書」の御言葉に、「荒れ野よ、荒地よ、喜び踊れ。砂漠よ、喜び、花を咲かせよ。野ばらの花を一面に咲かせよ。花を咲かせ、大いに喜んで、声を上げよ」（イザヤ 35:1~2）とあります。荒れ野の砂漠に咲く花を「野ばら」と呼んでいるのです。この御言葉に影響されたことかもしれませんが、同じ「イザヤ書」で待降節・降誕節に朗読される、「エッセイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち」（同 11:1）という御言葉をもとにした讃美歌 248 番「エッセイの根より」は、「エッセイの根より生いいでたる／預言によりて伝えられし／ばらは咲きぬ」と歌われてきました（『讃美歌 21』で歌詞が原詞に近い形に訳し直されました）。「待降節」の折り返しのときに、代々の教会は、クリスマスに「バラの花」の咲くことを思い描きながら、御子ご降誕の祝いの日を迎える備えをしてきたのです。

「待降節」はまだ続きますが、わたしたちの教会では、今日の午後すでに、こどもたちとクリスマスの祝いの礼拝を始めようとしています。このタイミングでクリスマスの礼拝を行うのは少し気が早いからか、こどもたちの参加率は必ずしも良くはありません。とは言え 24 日や 25 日に行くことは難しいですから、皆さんさえその気になってくださったら、できればもう一週遅らせて、降誕日直前の日曜日に、こどもたちだけでなく教会全体で、こどもたちを中心とした祝いの礼拝をできたらよいのではと相談したこともありました。今年はそうはなりませんので、皆さんが「こどもクリスマス」に加わってくださることで、こどもたちのクリスマスの祝いを支えていただきたいと思います。

いずれにしても、もうすでに気分はクリスマスの祝いの中に半分入り込んでいます。世の中のクリスマス気分は、もうすでに一か月以上続いています。それでも不思議なことだと思いますが、信者ではない人たちも、クリスマスの日付にはこだわりがあるようです。クリスマスの特別な祝いは、12月24日の夜に予定するのです。それは、信者の皆さん以上のこだわりにさえ見えます。「その日」が大切なのでしょう。「その日」は、予定通りの「その日」であるべきなのです。

しかしながら、旧約日課（マラキ書 3 章）の預言者が「見よ、その日が来る」と告げた「その日」は、必ずしも予定通りの「その日」ではないようです。それは、突然の来客がやってくるような予定外のこと。突然押しかけて来て、家の中にまで入り込んでくるような珍客を迎える日。教会は、御子のご降誕に備える「待降節」に、このような預言の御言葉を聞いてきたのです。

あなたの知らない方が…

「クリスマスの祝いの日が来る」。そのことを心に留めて、万難を排してその日に備えてくださっている方は少なくないでしょう。なかなか毎週礼拝においではなれない方が、「クリスマスには参ります」とお知らせくださるのはうれしいことです。教会で準備をすることに専心させていただいている者としては、身の引き締まる思いでもあります。その日が何よりもわたしたち信者にとって大切な祝いの日であることは、間違いありません。

そのような祝いのときを、わたしたちは、親しい友や気の置けない仲間と共に迎えたいと願います。せつかくの祝いのときなのです。まず何よりも自分たちが心から祝うことができるようにと願うのは、当然のことだと思います。

けれども、わたしは毎年大いに期待していることがあります。クリスマスの祝いの日にこそ、思いがけずおいでくださる方をお迎えしたい、と。教会の皆さんには、新しくおいでの方や思いがけずおいでの方をお迎えするのにてんてこ舞いになっていただきたい、と。

11月に開催した「オープンチャーチ」に、わたしたちは、多くの方をお迎えしました。その日には、あえて来会者のお名前も住所もつかないままだったので、どのような方がおいでくださったのか、きちんとした記録もありません。「そんな効率の悪いことを」とお叱りを受けるかもしれません。けれども、わたしはむしろ、この曖昧な状態を教会の営みの中に許容することが大切なのだと思っています。「あなたは、どなたですか」と問われることなく、そこに居ても良いのです。もちろん、「あなたは、どなたですか」と問われても答えないでいることができるのは、当然です。けれども、実際にそう問われたら、何らかの答えをしなければいけないと思うものでしょうし、それに答えたくなくて教会のようなところに来ることを警戒されている方もあるでしょう。逆に考えれば、それは当然です。紹介もなく一見で入ったところで名前や住所など根掘り葉掘り聞かれるとしたら、行くことを躊躇してしまいます。

福音書日課（ヨハネ1章）で、「洗礼者」と呼ばれるヨハネが、「**あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる**」と言っています。それは、まだ表舞台に出て来ていないけれども、まもなくヨハネと入れ替わるように登場してくる主イエスのことを指して言っているのです。それは、まだ「あなたがたの知らない方」だけれども、すでに「あなたがたの中」にいらっしゃると言うのです。すでにおいではなられているのだけれども、まだその方のことに気づいておらず、その方のことを知ってもいない、のです。

見知らぬ方、慣れぬ方を教会にお迎えしたとき、関心を持たずに済ませてしまうこともできますが、その方に関心を持って、心に留めることもできるでしょう。いいえ、むしろ積極的にそうすべきなのです。それは、わたしたちが主イエスという方をお迎えするときの仕方だからです。

すでにそこに、いらっしゃるのです。ただ、気づいていない。そこに目を向けるようにと、ヨハネは指を指して、わたしたちに促しているのでしょう。

「主の道をまっすぐに！」

まもなく迎えるクリスマスの祝いに、わたしたちは、飼い葉桶の中に寝かせられた乳飲み子の姿を見るでしょう。それは、長じて多くの弟子たちを従えるようになられた主イエスのお生まれになられたお姿だと、聖書は物語るでしょう。けれども、そのことを一体だれが、知っていたのでしょうか。その幼子は、人知れず家畜小屋で生まれたのです。その誕生が町や村に、その国に、告知されることなどありませんでした。いいえ、あの幼子が本当に長じてイエスとなられたのかさえ、確かめようがないかもしれない。けれども、教会は、「あの飼い葉桶に寝かせられた赤子を見よ」と教えてきたのです。

それは、主イエスがお教えくださったことがあったからなのでしょう。主イエスは、いつも、幼子や子ども、貧しい者、名も知られぬ者に目を向けられていました。弟子たちにも、そうするようにと教えていらっしゃいました。そして、「この最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」（マタイ 25:40）とおっしゃられたのです。見知らぬ小さな者に目を向け、手を差し伸べ、共に居ようとする。それが、主イエスを知ることになる。いいえ、それは、神を知るようになること。主イエスは、そうお示しになられたのではないのでしょうか。

確かに、わたしたちは、主イエスのことをそれほどよく知っているわけではないのです。二千年も前の中東に三十年ほど生きた一人のユダヤ人。学者たちがいくら詳しく調べ上げても、その人の本当のことはよく分からないままであるというのが、正直なところ。「そんな異国の人も、日本の先人に倣うべきだ」と考える人があるのも、もっともです。けれども、その「見知らぬイエスという方」を見るようにと、わたしたちは促されている。教会は、そう教えてきた。そして、その「見知らぬイエス」と共に生きようとしてきました。そのしるしとして、「洗礼」を受け、また授けてきました。

教会は、洗礼者ヨハネが、イザヤ書の預言を引いて「**主の道をまっすぐにせよ**」と呼びかけては洗礼を授けたことを受け継いできたのです。

「**主の道をまっすぐにせよ**」とヨハネは呼びかけました。それは、誤解を恐れずに言えば、宗教的になることではないし、内省的になることでもありません。「見知らぬイエス」と共に生きることです。

それは、究極の「見知らぬ方」、「神」と共に生きる道なのです。目の前の「見知らぬ人」に目を向け、手を差し伸べ、語り合い、共に生きる。その小さな営みの先の先に、わたしたちは、究極の「見知らぬ方」を見ているのです。「神と共に生きる」こととは、目の前の「見知らぬ人と共に生きる」ことなのです。

それは、簡単なことではないでしょう。二千年間、教会が訴え続け、キリスト者が増え続けても、なお、わたしたちの間にある現実には、「見知らぬ人と共に生きる」ことを拒もうとする世界です。けれども、わたしたちは、今年もクリスマスを祝おうとしている。見知らぬ「幼子」を、飼い葉桶の中に見いだそうとしている。そこにすべての人の目を向けさせようとしているのです。